

とっしあん

葉山の死顔に触れた子供がいた。同時に、冷たい、と言って泣きはじめた。天国へ行ったのよ、その子のお母さんは優しく頭をなでたが、黒い服の大人達に囲まれ、泣き声は一層高まった。僕は葉山の顔を見つめながら、お前、逝ったのか、もう話したりできないんだな、目も開けてくれないんだな、と心の奥で呟いた。大人ぶった友人と呼べる関係ではなかった。あくまで友達なのだ。小学校時代からの仲だからな。当時、特別親しい間柄ではなかったが、家の近所ということたまに会ったりしていた。仕事の話。教習所の女教官をいまだに追っかけている話。同窓会には必ず欠席するという理由。突然いなくなるのは卑怯だぞ。バイクで事故ったのだから、奴もまさかと思ったにちがいない。でも、逝ってしまったのは本当なのだ。悲しいとか、淋しいとかそういう気持ちとはちがう何か、心の中にある。きっと衝撃なのだ。葉山と同じ、人生の事故だ。それに押し潰されているのが、今の自分だ。お前はまだ生きているみたいだ。寝ているだけみたいだ。静かだな。こんな神妙な笑えない場所にお前はいるんだから、もう終わりなんだぞ。僕は明日からまたいつもの生活に戻るんだ。お前の存在は記憶から消し去れないけれど、会うなんてことはもう二度とできない。思い出は明日からの日常生活に邪魔なんだ。わかっているだろ。さよならだ。明日の事を思い浮かべた。レジ打ちだけれど、明日は木曜だから、暇だろうな……。白々とした青空を見ているうちに、葉山の笑顔が浮かんだ。グッド。そう言っているような気がした。

だらだらと歩いているうちに、家に六時に着いた。お清めの塩をふりかけ、玄関を開ける。台所からいつもの大声が聞こえてくる。

「おい、裕樹、葉山の葬式はどうだったい」

台所に足を進めると、酒の赤いパックが見える。また飲んでいるのか。

「とつつあん、もうやめたら。酒」

僕は父の事をとつつあんと呼んでいる。小さい頃からそうだ。

「あいつはあんまり家にはこなかったからなあ。あつけないよなあ、お前、友達減って淋しいだろうよ」

「酒癖の悪い父親をもって、淋しいさ。公務員なんてさ、残業もろくにないのかよ」

もうすでに酒をあおっている父なんか、残業漬けでいいのに……。役人の苦勞を知らな過ぎるという父の言葉が、やはり酒の愚痴にしか聞こえないのだ。家に帰ると、父親の子守りみたいな生活になってしまう。アル中ではないが、単なる酒好きなのだ。ちょびりちょびり飲んでいるようで、すぐに酔ってしまう父。それとも、大声で愚痴ったりするのは、性分なのだろうか。

「あ～あ、黒服なんか、早く、脱げたら、なあ、裕樹。似合うのは女なんだよ、お前みたいのには似合わないんだからよ」

少しだけ切なそうに言う。似合うのは女。ふと、母が死んだときには喪服の女達が集まったのだろうと頭を過る。僕もそのときいたのだろうが、あまりに幼すぎて覚えていない。父の記憶には染みついているのだろうが。ちょうど二歳のときに母は急に倒れてこの世を去ったのだ。友達と同じ、突然の事だった。母の微笑んだ遺影しか見たことがない。どういうわけか母の実家に仏壇があり、たまにしか見ない。父が母の写真を他に隠し持っているのだろうが、見せてくれるよ

う頼んだこともない。はぐらかす父の顔が目に浮かぶのだ。それに、僕自身、それほど郷愁に浸りたくもなかった。母がどんな顔をしていようと、もういないのだ。微笑んでいる母の遺影が一番幸せそうで、充分な気がする。幼いとき、母の代わりにしてくれたのは、母方の祖母であり、成人して仕事をするようになってからは、腰を曲げて福島へ帰ってしまった。福島には仏様の行事があるときだけ出向く。それ以外は疎遠になってしまった。祖母は品のいいお手伝いさんのようでもあり、堅苦しい先生のようにもあった。母が逝ってしまったことを幼いながら自覚していたのか、物心ついてからもおばあちゃんとしっかり口にしていた。なぜか僕は変に意識をして懐かなかったのだ。食事を作ってくれる人、洗濯をしてくれる人、背中を洗ってくれる人。そんなイメージだった。反抗期も迎えることはなかった。反抗したくても祖母は受け入れてくれそうもなかった。強い口調で潰されてしまうのが怖かった。だからなのか、こんな父がいても、特別頭にくることもなく、押し殺してしまう。それが習慣なのだ。

「今夜のメシは何かな、裕樹」

「……さあ、とつつあんはマグロの刺身でいいよね」

「あるのかよ、今夜は豪華だな。お前は何か食べるんだ」

急に声が高揚しはじめ、椅子から立ち上がって冷蔵庫をあさり始めた。

「え、僕は昨日作ったカレーの残りがあるから、それ食べるよ」

「おお、そうか……」

静かになった父の声を後にし、二階へそそくさとあがった。喪服でうろついているのも嫌になった。

「おーい、引き物はどうした、酒が入ってないかよ、お前、料理に使うだろ」

聞こえないふりをして、自室に入った。少しだけ汗ばんだ。クリーニングに出さなきゃ……。部屋の片隅に冬ごしさせたクワガタの入った水槽がある。持ち上げ、少しだけ振ってみる。あ、動いた。指を入れたら、針金のような足が皮膚に食い込んだ。羽根が黒光りして、一瞬ゴキブリに見えた。

「裕樹～、早くおりてこいよ、メシだよ、メシ、何やってんだ」

階段のすぐ真下で聞こえる。こもった声がぼやいている。

「……わかってるよ」

クワガタの水槽を置き、開け放たれたベランダの窓を閉めた。

火曜日の朝。一週間のスケジュールはしっかり記憶している。八時に起床し、父と僕の洗濯物を、昨夜回しておいた洗濯機から取り出して部屋に干す。少々遅いかもかもしれないが、僕の出勤は九時半で充分過ぎるほどなのだ。もうこの時間には父はいない。台所のテーブルにはパンくずがのった皿が一枚置いてある。僕はそれを流し台に持って行って洗う。テーブルは木製で新品のようにキズもろくについていない。誰もいない朝にはもう慣れている。そんなことより、今日は

ゴミだしの日なのだ。台所のゴミ箱からビニール袋を引き出し、強く縛る。僕の部屋のゴミ。父の部屋のゴミ。リビングルームのゴミ。それから、掃除機の中のゴミ……。なぜかそれほどゴミがない。生ゴミは、猫の額ほどの庭のコンポスターに捨てる。残りの捨てられるゴミを大きなビニール袋に詰め込み、玄関をでる。家から三メートルほど先にゴミ置き場がある。

「あら、裕樹君じゃないのよ、えらいわね、ほんとに」

近所の春名さんのおばさんもゴミを出しにくる。目と目が合う。月に何度同じ事を言われることか。ゴミだしなんて、やるのは僕しかいないのだ。やらなくてはならないし、ゴミが溜まるのは嫌いなのだ。父はやろうとはしないし、二日酔いの日も多い。小さい頃からの習慣で、僕自身、何とも思っていない。苦しめたこともないのだ。学校に行く途中に出す。そんなことが日常だ。偉いわけでもない。普通のことなのだ。家に戻り、掃除機を持ち出す。台所と父の部屋だけでもきれいにしておきたい。少しだけ散らばったゴミを吸い取らせる。掃除機が重いので、そろそろ買い換えなくては……。十年前から使っている掃除機なのだから、新型のがほしいのだが、父はなぜかうんと言わないのだ。たぶん、僕が掃除機をかけていること自体、知らないのだろう。台所の隅々まで吸い取る。廊下に出て、父の部屋に入る。六畳ほどの畳の部屋。ここは植物園なのだ。ゴミというより、得体の知れない虫が繁殖していないか気になる。三十センチほどのサボテン。松の盆栽。名前はわからないが、濃い緑色の長く垂れ下がった観葉植物の数々。薄茶色の陶器に細々とした枝が伸び、紫色の花がひとつ咲いている。観葉植物の青さが狭いジャングルの色なのだ。植物は部屋の三分の一ほどを占め、皆、日の入る窓に寄っている。北側には、小さな黒に近い茶のテーブル。その上には何も置かれていない。テーブルの下には座布団。そして、西側には子供用のような小さなタンス。その前には布団が丸まっている。入り口近くには、いつもの酒が一パック置いてある。掃除機を入れ、布団をどかし、ゴミを吸い取る。テーブルの上の埃を濡れたふきんで拭う。タンスの埃も同じだ。植物は簡単には動かさない。一番手前のサボテンを動かしたら、乾いた土がこぼれ落ちた。なんだか体の力が抜けて、元に戻ってしまった。占領してしまいそうな植物をわざわざどかして掃除するのはバカバカしい。いつもこのへんでやめてしまう。さっさと掃除機を持ち上げ、父の部屋を後にした。

母がいたとしても、僕はこんな生活をしてきたにちがいない。もし、母がいたら……と考えてみても、変化のある日常が頭に何も思い浮かんでこなかった。母がいた感覚がないせい、もしくはの想像ができない。僕に彼女がいない生活と同じ感覚なのだろう。

テーブルについてパンを齧る。牛乳も飲む。父と同じだ。冷蔵庫には沢山の食品が並んでもいないし、毎日仕事の帰りがけに買ってくるのは食パンと牛乳。もっと他に芸がありそうだが、それくらいしか思いつかない。父も不平不満を僕にぶついたりしない。酒の管理は父がしているせいか、それさえきらしていなければ文句はないみたいだ。もちろん、毎日の料理はできることだけするが、最近はマンネリ化している。昔から感じていたことなのに、最近はやけに気になる。カレーを作れば残るし、スパゲティやハンバーグなど作っても残ってしまう。何日も同じものを食べ続けたりするわけだ。カレーならうどんを入れたりする。父は僕のお子様ランチのような料理を食べなくなったせいだ。決して文句は言わないのだが、食べようとしめないのだ。休日買いだめをして、刺身やフライや、惣菜を冷蔵庫に置いておく。さすがに刺身は買いだめできないので、週一回となってしまう。それを父は楽しみにしているのだ。最近、漬物が欲しいとよく

口にする。買物日に買ってくると、嬉しそうに食べている。僕は自分の作る料理が少しだけ脂肪に変化をとげているのを感じている。父は僕と反対に痩せているのはなぜだろう。酒の飲みすぎだろうか。

九時十五分になると家をでる。自転車で猛スピードで走っていく。雨の日は傘さし運転になる。少しは足の筋肉を鍛えたい。ゆっくり自転車を漕ぐ中年の女の人を見ると、変に急かしたくなる。毎日同じ場所へ向かっていく。父だって役所の屁理屈も言わずに向かっている、たぶん。僕がまだ寝ているときも、いつてくるぞーの掛け声は忘れていないのだ。二日酔いの日はいつてくるよに変わる。帰宅後は頭が痛いとかいて、酒を控えるのだ。僕は、今日が重いとか面倒臭いとか、この自転車漕ぎの最中考えたりしない。もちろん、職場内でもそうだ。先輩達は、面倒くせーな〜とよく嘆いている。やめようかな〜とも口にする。僕が、今は転職難しいらしいですよと言うと、やっぱな、俺、デザイナーになろうかな、専門いくかな〜なんて適当な事を口にして紛らわしている。実際、先輩達は僕以上に長年勤め、実際辞めはしない。僕は、こうして、つまらないようで、暇つぶしの職場へひたすら向かっているのだ。

僕はジーンズショップに勤めている。もちろんジーンズのズボンがメインだ。棚一面に並んでいる。トレーナーやセーター、ブラウスも置いてある。もちろん女性物もある。売れ残りのセーターなど陳列したときは、重いと感じた。質が悪すぎ。内心思いながら、黙々と棚に並べることがある。安さを売り物にしているが、ズボンは結構質もよく、高い。そして、あまり売れないせいか、最近本社から値下げの指令があった。

ここには女性店員がいない。アルバイトもいない。僕も一応正社員だ。一応というのは、近所のジーンズショップにたいした熱意もなく、面接を受け、偶然受かったというだけだからだ。近所で利用をよくしていたし、変な抵抗もなかった。ただそれだけだった。月給もそれほど悪くはなかった。まあ少しばかりのボーナスもでる。条件として悪くなかったし、今までレジの経験もあった。そんなことがよかったのか、採用されて勤めている。勤めはじめて、ここには女性社員がいないということに気づいた。三十二歳の店長は、

「ここは男くさいな、飢えた狼ばかりさ」

と、下心ありそうによく口にする。先輩達は妙に飽きっぽい。女性客が来ると、視線の先がわかるのだ。勤務時間中は店内に散らばっているせいか、無言ではあるが。レジに立っている自分も、しっかり目で追っていたりする。カップルだったりすると、先輩達は急に仕事に精を出す。店長は結婚しているせいか、満足げに落ち着きはらっている。

「古木君、今日はタメシ食ってこー」

レジが暇であくびをしているときに、一つ先輩である中村さんが誘ってくれた。

「飲みにですか？」

「いやあ、そのへんで食べようよ。最近パソコン買ってさあ、金欠なんだよね。古木君は酒強いから悪いけどさあ」

「そんなことないですよお」

口元がにやける自分を自覚する。僕は父に似てか、酒が結構強いのだ。世の中には強い人間は山といるだろうが、かなり飲める、そう思っている。日本酒をコップで三杯は平気だ。仲間が酔いつぶれても、自分はまだいける、二日酔いになったためしがない。強いと思うのはそんなことだろうか。中村さんは酒には弱いので、僕を半分うらやましがっていることがある。頻繁には飲みに行かない。一カ月にせいぜい一度くらいだ。あとは店長のつまらないイベント会などでだ。

「客もこないし、暇だし、ネットのメール交換が唯一なんだよなあ」

中村さんはふてくされたような顔をして呟いた。

「メール交換ですか、彼女ですか」

「ちがう、それが男、男なんだよ。そいつ、まじなんだよなあ。でもさ、俺、ネット上、女なんだよね」

思わず絶句してしまった。実は僕も女の子とメール交換してるんです、そう言おうと思っていたからだ。ネットの世界ってこんな崩壊しているのか。がくつと肩が落ちる思いがした。僕のメール交換は大丈夫なんだろうか……。ふと心配になる。

「会いたいとか、食事しない？とか言ってくるんだ、それに写真送ってくれとか携帯番号教えてくれとか……。それで、もう少したつてからって事にしてるんだよね。いつまで続くのかなあ」

中村さんは、ハッハッと小さく笑った。つまらなさそうでもある。僕は、自分のメール交換には真面目である。始めてから二、三カ月たつが、会いたいとか顔が見たいなどと迫ったためしがない。こっちもそれほど自信がない。格好もそれほどよくないし、太り気味だ。彼女も積極的ではない。一日の出来事をメールにして送ったり、自分がいかにブサイクであるかなど、熱弁をふるうこともある。それでもメールをお互いやめないのは、心にぽっかり穴が空いているせいかもしれない。日常生活も面白くないのだろう。毎日かかさず続いている。僕も彼女も根気強い。いつ終わりがくるのか……、そんなことを考えた事すらなかった。彼女がもし男であったとしても、それはそれで面白かったと思う日がくるのかもしれない。中村さんのメールでの恋愛ごっこは、ネットの入り組んだ迷路にしっかりと足を踏み込んだとっていい。これは他人事だろうか。ふと前を向いたら、背の高い男性客が立っていた。

「ベルトってありませんか？」

「あります、こちらですよ」

中村さんはそそくさと僕の隣から離れた。

「古木君、レジ、暇だろ、品出しやってくれないかなあ。レジは私がやるからさ」

急に店長が声をかけた。僕は、はい、と返事をして、その場を離れた。

いつもの赤い酒パックの横に、五百ミリリットルのビールの缶がテーブルに置いてある。父は椅子にもたれ、ようじで歯の隙間をつついていいる。アルコール類の他には、ご飯の茶碗とスーパーで買っておいた惣菜のカラのパックが置いてある。湯のみ茶碗。出窓に置かれたテレビの中で、若手歌手が演歌をうたっている。

「おい、裕樹。米がゆるかったぞ。いつ炊いたんだよ」

ふらついた声でいう。頼りない。無視しようとしたが、ビールの缶を手で握り潰した音に振り向くと、思わず目が合ってしまった。

「昨日だけど、水がちょっと多かっただけだよ。クレームつけるなら、今度からとつつあんが炊いてよ」

「クレームってなんだよ、クレーム。クレームって言葉好きじゃないんだよ、俺はさあ。俺は公務員だぞ、やめても公務員なんだ」

時々、難解なことを言う。よくこれで役人なんかやっつけられる。公務員ってろくな人間がないんだな。僕はたった一人の目の前の父の姿を目にすると、公務員への偏見が生まれてしまう。職場の仲間は、公務員なんて口にすると、固そう〜と口々に言う。そして、公務員にはなりたくないと言う。僕も同じだ。父は例外の公務員かもしれないかもしれないが、どうも民間が合っている僕は、こんな生活にそこそこ納得している。役所をみると、あんなでっかいビルに入りたくないね、そう心から思うのだ。

「いつまでタメシしてるわけ？ いつ家に帰ってきたんだよ」

「なんだ、裕樹、俺が建てた家に文句つけるのかよ」

口の中で声を発しているようなモコモコした声。酔っているのか。つまらない父の前から去ったほうがよさそうだ。何を言ってもまともに答えてくれそうにない。部屋にいこうと階段に足をかけようとする、ホホホッと不気味な笑い声が台所から聞こえてくる。

「裕樹、家族の中でお前が一番怖いんだよ〜」

「家族って、とつつあんと僕しかいないじゃん」

僕は少し腹をたて、捨てセリフを口にして、階段を一気にのぼった。なぜか知らないが、急に家族を増やしたい気持ちになった。父に付き合ってもらえない、そう思ってしまう。誰か他の人がいれば、もう少しまともかもしれないのに……。職場にいる父を一度でいいから見てみたい。そんな気持ちも過る。実際、役所に足を踏み入れることは簡単なのだが、ボケてそんな父を見るのが嫌で偵察なんてできない。このあたりで一番嫌いな場所といたら、やはり役所だろうか。

僕は自分の部屋に足を踏み入れた。ベッドの上の布団が丸まっている。シーツも暴れた後みたいだ。五百ミリリットルのペットボトルもいくつか散乱している。洋服が置きっぱなしになっている。タンスがあるのに、濁ったズボンも入れていない。パソコンの横には、九州旅行に行った友達からもらった宇宙人の人形が転がっている。なんか雑然としている。父の部屋は掃除できても、自分の部屋は一言でいって汚い。どこをどう片づけていいのかわからない。どのペットボトルも飲みかけだし、いずれはくズボンをタンスにしまっても仕方がない。どうしたらいいのかわからない。居心地はいいに決まっているのだけれど……。そういえば、当分掃除機もかけていない。それでも、ホッとするのはなぜだろうか。父の酒臭い息を吸うのはうんざりする。こんな部屋でも僕は好きなのだ。熟睡できるのだから、布団に埃がついていたとしても心地よいのだ。そういえば、一階は掃除しても、自分が住む二階は掃除してないな、今気づいた。

まあいいや、そんな気持ちになって、パソコンの電源をいれる。メールをチェックするぞ。急に華やいだ気分になる。小心なのか、心臓がドキドキする。ネットに接続する。すると、

「おーい、裕樹〜、お前、仕事やってるかよっ」

と、声の下から聞こえてくる。こういうときは無視するべし。自分にそう言い聞かせ、パソコンを操作しだす。運よく父の声は一度しか聞こえなかった。メールが一通入っている。いつも一通だけ……。広告メールの削除は面倒だ。さっぱりとした言葉が画面に浮き彫りとなっている。こんばんは。今までのメール全部の件名が、こんばんは、なのだ。

こんばんは。

今日は失敗ばかり。落ち込んでいるの。でも、メール打つのは楽しいよ。前の私だったら、きっと泣き寝入りだろうな。壁に本を投げつけるとか。そんなことでまぎらわせていただろうと思うんだよね。こうしてヒロ君とメールできているから、一日の悔しかったことでも何でも書いて安心して寝るんだ。それでね、今日の失敗はね、会社でね、お茶を紙の上にこぼしてしまったのよ。課長が、重要書類なんだ、どうしてくれるんだって迫ってきたの。私って元々臆病だから、はい、申し訳ありませんって頭を下げる一方で、課長の顔さえ見ることができなかったのよね。ところで、重要書類って何って思って少し見たら、午前中に私がコピーしたものだったの。中身は忘れてしまったけど、たいしたものじゃなかったし、三十枚もコピーしたのよ。それなのに、大きな声で課長は怒るのよね。ひどいよね。私が気に食わないの？って感じだった。課長って変



に大声で怒鳴ったりして、機嫌がいいときないの。家庭がうまくいってないんじゃないの？って一瞬思っちゃった。でも、怒られた私は、一日しょぼくれてたわよ。開き直りが遅いし、私ってガラス細工よね……なんて変に感傷的になってしまったり。家に帰ってきて、こうしてメール打ってヒロ君にこうして伝えていることでやっとホッとしてるのよ。明日、会社いくのすごく憂鬱なんだけど。新入社員って辛いんだ。私一人だけだし……。

ヒロ君は、今日はどうだった？ ジーンズショップってどうなの？ 男ばかりっていったけど、退屈じゃない？ ごめんね、質問攻めにして。どうして私ってもっとずうずうしくなれないのかな。やっぱり遺伝子のせい？ 私の父は結構エリート大学でてるのに、平社員なのよ。出世したくないって言い張ってるの。ごめん、父のことなんてどうでもいいのよね。くだらないことばかりでヒロ君退屈だよ。明日はもっと楽しい話ができるといいな……。

マミ

二十四歳、独身、建設会社に勤めるマミさん。最初は自己紹介だらけだったが、最近はこんな内容が多い。僕はマミさんをフォローしつつ、仕事や自分の考えを織り交ぜてメールする。恋愛模様は見えそうで見えない。職場ではとても出会いはない。それに、客には手を出してはいけない規則になっているので、これまた何にもないのだ。先輩の中には、風俗にいったる人もいるが、僕にそんな遊び心もない。地味にメールをしている。メール相手を探すのは難しい、女はまるでダメだね、と中村さんは言っているが、僕は何気に漁っているうちにマミさんを捕まえた。そんな悪い子ではない。歳も同じくらいだし、顔が見えないだけで、文章からすると結構いい感じの子だ。僕も普通の人間だから、顔を見てみたいと思うこともある。けれども、見て興ざめしたりする自分のおろかさに気づくのが嫌なのだ。顔ってどれだけ重要だろうか。自分もてる顔ではない。半分は自分の顔をマミさんに見せ、がっかりさせるのも気になるのだ。かといって、顔を自信にするのも傲慢で、好きにはなれない。自分に自信がないから、つい謙虚になってしまう。僕が自分のブサイクさをメールで主張したとき、マミさんも私も顔には自信がないと言っていた。お互いずるずるといった関係なのかもしれない。ここで、会いたい、話したい、顔が見たい、と言った表現をしたなら、ぷつぷつとこの関係は崩れてしまうのかも……と思うと、臆病になってしまう。少しだけドキドキしていたい。そんな状態の僕の鼓動はマミさんに届いているだろうか。メールってそんなものなのだ。夢か幻か、そんなものであると自分なりに解釈しているのだ。

一階から歌が聞こえてきた。父は石原裕次郎が好きで、たまにだが、カセットで流す。音も半端じゃない。裕次郎の声とともに、父のへたくその声が混じってうるさいのだ。僕は気持ちを傾けたパソコンを蹴飛ばしたい気持ちになり、苛々する。あの酔っ払いめ！ マミさんのメールを汚される気がする。

「とつつあん、うるさいよ！ 静かにしろったら！」

いくら叫んでも裕次郎の低音に打ち消されてしまっている。あきらめ、僕もCDをかける。今ヒット中のアイドルの意味不明の歌詞にリズム。マミさんに返信をする。

今夜はついてない。父が夜中に叫んだのだ。喧嘩ごしに一人で何か言ってる。寝言なのだろうが、注意をしても直るものではない。そんなときは決まって目が覚めるのだ。仕事仲間には、

我家の怪奇現象と言って笑い話にしているが、本当にうざったい。

日曜、家に帰ると、台所のテーブルに水槽が置いてあり、父がそれを眺めている。僕は買ってきた牛乳を冷蔵庫に入れようと、台所に足を踏み入れる。

「おい、これ見てみろ」

酒を飲んでいない。得意げに半分にやついている。早く見ろよとばかりに椅子から立ち上がった。僕は高さ三十センチほどの水槽に目を凝らす。メダカより少し大きく、白い小魚がオレンジ色のレースのような尾をひらつかせて泳いでいる。

「どーだ、いいだろ」

父はますます得意げな顔をしている。俺が釣ってきたんだぞ、そんな顔だ。

「これ何、熱帯魚でしょ」

「グッピーっていうんだ、ホームセンターにいったらな、五十円で売ってたんだ、十匹買ってる子供もいたぞ」

「なんで一匹だけ？ もっとたくさん買ってくればよかったじゃん」

「たの金セットも買ったからな、一匹は貴重なんだぞ、父さんが一人しかいないのは貴重だろ？」

返事をするのを躊躇して、グッピーとやらを眺めた。ひらひらとしてキレイだ。

「……ところで、たの金セットって何？」

僕は背筋を伸ばして父に聞いた。父はまたもや得意げな顔をした。

「楽しく金魚を飼おうというセットだ。水槽と餌がついている。ん？ エアポンプとかもついてたな。結構高かったんだぞ。でな、店の人が、これは熱帯魚ですから、ヒーターつけた方がいいと言われたからさ、水を煮沸して冷ましたのをに入れてやったら、グッピーは生き生きしてるんだ。やっぱり昔の知恵はすごいなあ、そうだろ、裕樹」

どこかずれているのを感じながら、黙ってしまった。これは熱帯魚で、金魚ではない。それに、水を温めても、夜には冷めてしまうのではないだろうか。どこか納得できないのだが、父が満足げに酒を飲まずに何か没頭して見ている姿はいい、そんな気持ちにもなった。

「そのさ、エアポンプはつけないわけ？」

「だって一匹だろう。酸素なんかそんな必要ないさ。ほら、人間だって一定の広さがあれば平気なんだ。こいつは邪魔がいなくてのびのびしてるよなあ」

父がどう言おうとも、グッピーは自由に泳いでいる。グッピーは父を選んで家にきたわけではないのだが、幸せなのかどうなのか。今まで熱帯魚なんぞ興味もなかった父も僕も黙りこんだ。眺めれば眺めるほど、小刻みに震えるレースの尾が美しく思えてならない。一匹しか買ってこなかった父は正解かもしれない。ゆうゆうと泳ぐグッピーはかよわく、はかなそうで美しさが増すのだ。

「このグッピーは何産？」

「さあ、国産じゃないのか……」

父の答えは的を得ているのか。養殖して国産。とつつあんのバカ。心の底で呟きながら、グッピーに免じて許そうと思った。

翌朝、グッピーは死んでいた。水面に体を横たえて、ポワンと浮いている。テーブルの上には書き置きが置いてある。

裕樹へ

グッピーが死んでショックだ。残念だが、コンポスターの横へでも埋めてくれ

父は勝手に買ってきて、死骸を僕に片づけさせようとしている。勝手なもんだ。でも、このままにしておくわけにはいかない。グッピーが哀れだ。僕は朝食をとる前に、水槽を家の裏にもっていき、コンポスターの横に穴を掘り、その中にグッピーを入れた。昨日まで生きていたとは思えない気がした。葉山のときもそうだった。突然魂が抜けたように、何時間前の生きていた昨日には戻ってくれない。そんな時間が悲しかった。僕は理由もなく泣いた。グッピーのどこも見えない目が、見れば見るほど悲しい気分させた。そして、早く土をかけてしまった。あの小さな生気の失った目を見るのが怖かったのだ。

夜、父はまた新たなグッピーを一匹だけ買ってきていた。

「もう死なせたくないよ。せめてポンプだけいれよう」

父はなぜか素直に頷いて、エアポンプを水槽に沈めた。

「なあ、昨日は五十円だったけどな、今日は三百円になってたぞ、グッピー。もともとありゃ、高いもんなんだなあ。昨日たくさん買ってあげばよかったなあ。今度こそ長生きしてくれなきゃな」

「だいたい金魚のセット買ってきて平気なわけ？ これ熱帯魚なんだってわかってんの？とつあん」

「バカいえ、そんなのわかってるよ。こんなやわな魚だとは思わなかったからな。だいたい、金魚も熱帯魚も同じようなものだよ。まあ、昨日のは弱かったのかもな」

死んでしまったグッピーのコピーのような新しいグッピーは、やはり生き生きとしていた。ひらついた尾がきれいだ。すっかり悲しい気分もなくなり、マミさんにグッピーが死んだことと、新しいグッピーを父が買って来たことを詳しくメールに書いた。マミさんのメールは会社でいかに雑に扱われているかを、奮起したように長く書かれている。仕事帰りにコンビニで買ったアルコールを飲みながら、マミさんのメールを読んでいると気分が高揚してきた。疲れもどっと出て、マミさんに会ってみたい気持ちを高ぶらせながら、布団に顔を擦りつけ、そのまま寝てしまった。

翌朝、またもやグッピーは死んでいた。そして、墓を作ってくれるよう置手紙がしてある。コンポスターの反対側に穴を掘って埋めた。なるべく目を見ないようにし、小さな墓を作ってやった。

父は、また同じグッピーを買ってきた。そして、翌朝死んでいた。何度も買ってこないように注意したが、父は聞いてはくれなかった。その繰り返しが一週間続いた。僕はグッピーの死んだ目を見ても悲しくはならなくなっていた。コンポスターの周りには、グッピーの小さな墓場ができた。二週間後、

「もしかして、グッピーより金魚の方がいいのかな……」

父は独り言を言ったが、今度こそは買ってこなかった。

水曜夜十二時、僕は床にワックスをかけ始めた。階段の綿埃が意外と目立つ。乳白色のミルクのようなワックスを、犬の足跡のように垂らす。少しずつではあるが、雑巾でせっせと磨き上げる。以前、祖母と僕でやっていたことだ。月一回くらい、祖母がやっていたことを手伝っていたのだ。祖母は、「裕樹君が手伝ってくれるから助かるわあ」と律儀にそう言って、腰のあたりをよくこぶしで叩いていた。祖母がここから去ってしまってから、ワックスをかけるのが習慣になりつつある。一定時期がくると、妙にワックスをかけたくなるのだ。こんな地味な仕事、と頭の中で思うのだが、どうしてもやりたくなる。そして、夜中、父も寝静まった頃、ごそそと動き出すのだ。快感とまではいかないが、無心になれるこの気持ちがかたまらなく心地よい。床を磨き上げる。新築ではないからそんなに光らないのだが、ワックスをかけると少し生き返ってくれる気がするのだ。そのくせ、自分の部屋は雑然としてるのが僕の矛盾しているところだ。ちらかっている方が安心する。職場でこんな話をすると、「まじめだねえ、一家に一台って感じだよねえ。まめ男君だよ」と言われたりする。僕ってそんなに気のきく人間？ 少し疑問だ。

「おい、おい、どこいくんだよ」

突然、家中に響き渡った。もちろん父の声だ。喧嘩ごしだ。寝る前に酒を飲んで寝たにちがいない。きまって寝言だかたわ言で、僕以外の生き物を震撼させる。ゴキブリだって、あの声でびくついて隠れてしまうだろう。

「俺をバカにする気か！」

父の声はヒートアップしている。僕は父の部屋の前までいき、少しばかりドアを開ける。「とっつあん、うるさいよっ」

「おお、そうか、ならいい」

たまにだが、寝ながら受け答えをしてくれる。すぐに静まってしまった。父の脳はどうなっているのだろうか。自分の父ながら、情けなくなるときがある。僕もいつかこうなるのだろうか。いや、絶対にならないさ。父のできないパソコンもできるし、変な寝言を言ったり、学習しないとっつあんみたいになったりはしないさ。そう言い聞かせ、床を磨き込む。そう、この後、マミさんにメールを書かなくては……。

こんばんは

もうおはようだね。みればわかると思うけど、もう二時なんだ。ちょっと掃除をしてたら、こんなに時間がたってしまったよ。僕は昔から夜型なんだよね。マミさんはもうとっくに寝ているんだろうけど……。夜はあまりに静かすぎて何かをしたくなってしまうんだ。でも、今日はこのメールを書いたら寝るよ。掃除で少し体を動かしたら、ほんの少しだけだるくなってきたんだ。

マミさん、仕事で疲れてるようだね。その上司ってどんな人なんだろう。送られてくるメールを読むと、マミさんにやつあたりしてるような気がする。職場で一番辛いのは人間関係かもしれないよね。マミさんは少しも悪くないよ。自分が悪いなんて思わないでほしいんだ。僕はマミさ

んを応援するよ。メールで言うしかできないけど、ママさんの味方であるから安心してほしい。そして、決して自分は悪くないことをママさん自身思っしてほしいと心から願っているよ。最近のメールでは、少し悲観しているようだから心配してるんだ。僕だってただの人間だから、悲観することだってあるけどね、何でもしすぎるのはよくない気がするんだ。おせっかいかな。メールだと文字でしか伝わらないから、これでも何とか書いているんだよ。前に、僕が自分がブサイクでもてない男だとメールして嘆いたこともあったよね。今まで、学生時代も女の子が振り向いてくれた試しがないんだ。僕はだんだんほんの小さな事をあきらめていくようになったんだ。どうせ、僕なんて……っていう具合に。自信が砕けて粉々に散らばって、まとめることができない自分になっていくんだよ。でも、今立ちどまってセーブしているよ。こうしてどこかにいるママさんとメールもしているし、仕事もまあしているし、生きているし……。小さな事数えると、限りないほどたくさんいろんな事があるよね。捨てられそうで捨てられないもの。あんまりちっぽけな事にかたくなになると、自分も壊れてしまうよ。僕ってナーバスな人間かなあ。目がさめて、青空が窓から見えたりすると、生きている自分になぜか嬉しくなるんだ。それでもさ、やっぱりコンプレックスはたくさんあるよ。解消されないけど、その中には個性もあって、あきらめたり、こだわったり……。それなりにやっていきたいと思うんだ。くどいね、僕って。昼間は仕事もあるせいか、結構あっさりしてるんだけどね。夜って頭が妙に働いてしまうな。しつこくてごめん。こうして書いて変に後悔するのは、ママさんと似ているかもしれない。まだまだ砕けた自信は、文章どおりに立派にはいかないよね。難しいことだよね……。

もうそろそろ寝るよ。今日はママさんにとっていい日になってほしいよ。

おやすみ！

ヒロ

職場の仲間達と夕飯を食べにいった。もちろん店長を抜かしてだ。結婚している店長は、僕らにとっては面白くない存在なのだ。いつもいくファミレスだが、イタリアン専門で僕らは居酒屋よりよく顔をだす。低コストで終わるからだ。今日も、パスタとピザを何品か注文する。それを適当につまんで食べるのだ。ほとんどは雑談でいつの間にか皿がきれいになっていたりする。

「間宮さんはいいですね、彼女とよりが戻ったっていうじゃないですか」

中村さんが一番の年上の先輩間宮さんをからかうように言う。

「僕、初耳ですよ、彼女って前にいましたっけ」

僕も追いうちをかける。

「え～、高校時代の友達みたいな奴さ。でもさ、恋愛感情はまずないよ、お互い誰もいないから、そいつからメールで食事に誘われて、なんとなく付き合うっていう感じになっただけ。そいつ、きっと男にふられたんだよ、妙におとなしくなっちゃったし、なんか異様な空気だったけどな。それに、あんまりかわいくない子なんだよね、ちなみにそれって顔」

中村さんは少しだけほっとした顔をした。

僕は父のことが頭を過った。帰りが多少遅くなることを留守電に残しておかなかった。今かけてもいいのだが、なんだかファザコンみたいで仲間知られるのは気がひけてできない。また酒をあびているか、コンビニにでも弁当を買いにいつてくれるか。一番困るのは、僕が帰ってこないのにパニックって、携帯に電話をかけてくることだ。僕は変なプライドがあるのか、それほど遅くない時間に子供扱いされるのが嫌だった。二十三の僕も一応大人であり、家出青年になつたりはしないのだ。そっとズボンのポケットに手をやり、携帯の電源を切った。こうしておけば父からの干渉もストップできる。ホッと胸をなでおろした。

「なんでバイトをいれないんですか、女の子いれればいいと思うけど」

同期の須藤君の声が聞こえた。

「会社の方針なんじゃないの？ 小人数の社員をこきつかってるんだ。でも、この不況にさ、バイトいれればいいのに……。社長がホモなのか、バイトってもんを知らないのか、それとも～男のファッション業界に力いれてるつもりなのか……。ん～わからないね」

「たしか、社長はじーさんだったよな、七十過ぎてたはずだけど……。男尊女卑ってあるんじゃないの？ 頭固いんだよ、それより俺達には女が必要なんだよっ」

先輩達はおおいに頷いた。僕もピザを口に運びながら、首をこくりと下に向けた。男が集まるとすぐ女の子の話になってしまう。飢えた狼みたいに、地球上に女がいるかぎり、一人はゲットしなくてはいけないという闘志丸だしになってしまう。退屈な毎日にスパイスがないせいか、げんなりとして、こうしてやたら口にしても女の子はどこでどうつかまるのかわからずいるのだ。

「でもさ、なんで店長は結婚してるんですか？ どこで見つけたんだろう」

「さあ、きっと見合いさ。それしかない、見合い、見合い」

店長の悪口に話が切りかわった。僕はこんな場では、もっぱら聞き手役で食べるの専門になってしまう。仲間は誰も僕が女の子とメールをしていることなど知らない。案外秘密主義だな、心の中でそう思った。

帰宅すると、父は台所のテーブルについて新聞を読んでいた。酒を飲んでいる気配はない。メ

ガネを手で少しばかり上にやり、僕の方を向いた。

「お前は若くていいな、俺はもう歳だ」

くたびれている老人のような喋り方だ。僕は炊飯器に目をやった。米を炊いておかなくは……。毎日手順よくやるのだが、父がしらふでいることに戸惑ってしまう。だいたい静かに眩く父とそばにいたことがない。どこかでハイテンションになっているはずだが、今日はどういうことだろうか。職場で何かあったのだろうか。それとも、酒を断ってまともに僕を支援してくれるとでもいうのだろうか。家を占領しているように、どっかりと腰を降ろしている。僕としては、もやもやしたものを不思議と感じるのだ。

「とつつあん、今日は酒を飲まないわけ？」

少しだけ緊張している。酒で僕を振りまわしてきた父はあまり好きにはなれない。けれども、断酒して普通になってしまうのは、それはそれで怖い気がする。

「寝る前に飲むことにしたんだ。そうすると、よく眠れるからな」

「酒は睡眠薬じゃないよ」

「いいだろ、ちょっとぐらい。俺は裕樹が思っているほど、酒飲みじゃないぞ。もう歳だと言ってるんだ」

ぼそぼそとしているが、強い口調であった。僕は貫禄ある父を思い描いたことはないが、今だけ親父らしいと思ってしまった。炊飯器に残っているご飯を皿に移し、かまを洗い始めた。でも、手伝ってはくれないんだよね。父をちらと見るが、やはり新聞から目を離してはいないのだ。

「裕樹は若いからいいけど、俺はハイビジョン見たいなあ。な、ハイビジョン、どうだよ」

僕はラジオをつけた。父の声が耳につく。しんとした空間に押し潰されそうな気がした。「好きにすればいいよ、とつつあんのしたいようにすればいいよ」

「おお、そうか……」

それ以来黙ってしまった。ラジオから流行りのポップスが流れる。顔を覆いたくなるほど、僕はなぜだかわからないが、疲れていた。マミさんどうしているだろう。同じ東京のどこかにいる彼女は、近いようで遠く感じる。小鳥のような声を聞きたい。僕ではなく、職場の仲間でもなく、異性を感じたいのだ。そう思えば思うほど、かまをキュッキュッと指でこすっていた。

「裕樹の部屋は緑が少ないだろ、観葉植物くらい俺のをやってもいいぞ」

父のはげあがった頭に目だけ向けて、僕は返事をするのも嫌になっていた。

僕はたまに秋葉原へいく。秋葉原は日本中の電化製品を集めたような所だ。若いカップルが結構増えてきた。胸に爆弾を抱えたような気持ちになっている。大きな黒いカバンを持って、中年の男がうろついたりすると、僕はなんだかホッとするというのに。電化製品の店の前を歩きながら、ふとバカバカしい感傷が襲う。マウスの叩き売りをしているまだ若そうな男の店員。額に汗をかいている。パソコンもデジカメもゲームも、僕にはすごい誘惑なんだけれど、胸に穴があいた感覚がする。秋葉原を歩く僕は、都心を歩くアリみたいな存在にすぎないのだ。秋葉原は



、僕にとって、男が汗かく場所にしか思えなくなっていた。カップルには目をそらす。それでも、こうして足を向ける。

今日はちょっとしたお目当てがあったのだ。電化製品の店の隣のゲームショップに入る。僕より大きな腹をした男が、異様に大きなカバンを肩から下げてうろついている。十代と思える少年もいる。僕がひたすら探した激安店がここだったのだ。ゲームが山と揃っている。僕は目を見開いて、お目当てのゲームを探す。レジをしている若い店員は知らんぷりして下の方を向いている。「おねがいミキちゃん 本日発売」蛍光ペンでかかれた文字に目を光らせた。あった！心の中で叫んだ。僕は値段も確認せず、レジへと持っていった。

「ポストカードがつきます」

店員は無愛想だったが、かまわなかった。七千八百五十円。決して安い値段ではないが、僕にとっては無駄のない買物だ。少し、いや、とても満足している。今夜はこのゲームをやろう。前々からチェックしていたゲームだが、売れきれではなくてよかった。「おねがいミキちゃん」は、僕の生活のスケジュールを入力すると、アニメのかわいい女の子ミキちゃんが僕の生活を管理してくれたり、答えてくれたりする。パソコンをつければ、いつでもミキちゃんは僕を見ていてくれるのだ。

僕は少しばかり歩き疲れて、休む場所を探した。喫茶店を探せばいいのだが、タバコが嫌いなのだ。親ゆずりかもしれない。父もタバコを吸ったりはしない。コーヒーショップも禁煙にしても、異様に混んでいたりしてまずくつろげない。たくさんの電化製品の店の通りを過ぎ、人目が少ない路地に入った。いつもなら、電車で地元に戻ってファーストフードの店に入ってしまうのだが、今日はもう少し秋葉原にいたい気持ちになった。ゲームを手にして、彩りが添えられた気分なのだ。ラーメン屋の看板が目飛び込んできた。「燕屋ラーメン」店の前で足がとまった。秋葉原に似つかわしくないほど古く、誰も入りそうにない所だった。曇りガラスから中を見ると、誰も入っていない。厨房に白髪の老人らしき人がいて、調理をしている。カウンターもあるが、その他にひとつテーブル席がある。誰もいないし、腹もすいてきた。店内にたてかけてあるメニューを見ると、どれも五百円代だった。とりあえず落ち着けそうだ。思いきって中に入った。

「いらっしやい」

どうでもいいようなハキのない声は、自分をも否定してしまいそうに聞こえた。僕はテーブル席に迷わず座った。

「お客さん、カウンターじゃないんですか？　そこじゃあ、運ぶの大変だからこっちにしませんかね」

しぶしぶ、カウンター席についた。ついに落ち着けない状況になったが、安いラーメンを食べればそれでいい気分になっていた。醤油ラーメンを頼んだ。「へい」と頼りなく返事をして、麺をゆで始めた。

僕はポストカードを取りだし、ミキちゃんの愛らしい顔を見ていた。こんなにウエストと足が細くて、胸が大きくて……。こんな子が僕の生活を見ていてくれるなんて、幸福な理想が現実を打ち砕いてしまいそうだ。そう思うと、怖くなった。明日は店で伝票整理じゃないか。我に返って、ポストカードをしまった。頬づえをつき、頭の中は空洞になっている自分を自覚しながら

、ラーメンが目の前に置かれるのを待っている。目を瞑ると、息をするのも忘れてしまうくらいぼんやりした。

ドンと目の前で音がした。ラーメンが置かれている。

「ごゆっくり」

すぐにラーメンを啜った。スープがやけにぬるい。麺も……やはり伸びていた。チャーシューは脂ぎっている。メンマも柔らかい。誰も入らない理由がわかりながら、まずいラーメンを腹に入れた。味も感じないほどの早食いだった。

食べ終わると、さっさと店を出た。もう二度と来るもんか、そう思いながら、駅へ向かった。あんなまずいラーメンを食べたせいか、額に汗をかいた。洗濯物をとり入れなくちゃな。今夜の夕飯は何にしようか、スーパーで何か買ってくるものはあるか……。まるで主婦の感覚だ。取り巻く現実を僕を執拗に追いかけてくるのだ。ふと横を見ると、まだ同じ店員がマウスの叩き売りをやっている。僕は大きくびくして、駅に吸い込まれるようにして入っていった。

マミさんには、秋葉原へいったことは内緒にすることにした。家事をすることの奮闘メールを送り、「おねがいミキちゃん」をパソコンで立ち上げてみた。

ミキ、つまらないな！ 私の事どう思ってる？ ミキが君を束縛しちゃう！

画面上に浮き上がったメッセージにたじたじになりながら、僕は一日のスケジュールを、画面のミキちゃんの言いなりになりながら、打ち込み始めた。

家族が二人だけだと、恐ろしいほど父の事が目につく。父が何をやっているのか、僕は時には気分を害し、突きつめたくなる時があるのだ。今夜は酒を飲んでいる父。寝る前に飲むと言っていた話はどこへ行ってしまったのだろう。しらふでハイビジョンが見たいと静かに答えていた父は幻だったのか。約束を破られたような、敬白だと思ってしまう父への腹だたしさが、僕の胃のあたりをムカムカさせる。

「どうして酒を飲むんだよ、どうなってるんだよ」

僕は、作りたての肉じゃがを父と自分の分を盛った。小さめのジャガイモには味がしっかり染み込んでいるようだが、おいしそうだという気分にはなれなかった。空腹を埋めればそれでいいのだ。酒のみの父がそこにいて、肉じゃがの匂いは消し去られている。悶々としているのに、わめくわけにもいかない。大声で注意することもできない。過剰に反応したくはないが、父とはごくごく普通の会話がしたかった。

「おお、裕樹、うまいな、お前、店出せるよっ」

まだ食べてもいないのに、そんな事を言っている。

「とつつあんには飽きれるよ、また酒飲み出すなんてさ。たまにはさ、外で飲んでくればいいじゃん、酒でくたつてるとつつあんなか迷惑なんだよ」

声を押し殺してようやく言った。心の爆発寸前の風船が、少しだけしぼんでいく気分だった。父は、急に大声を出した。

「迷惑だと、俺を何様だと思ってるんだ、この家の棟梁にナニ言うんだ！ 裕樹～お前は俺をどこまで侮辱すれば気がすむんだ。店で飲んだら金がかかるでないかね。なーそーだろっ、俺をないがしろにするつもりかっ」

父は緩やかに倒れるように長椅子に体を横たえた。

「俺がここにいたら迷惑なのかよっ。お前、まさか、俺を追い出すつもりじゃないだろうな～」

顔さえ見えないものの、酔った声だけは家中に響き渡っている。テーブルの上に肉じゃがを置いたが、さっぱり食べる様子はない。肉じゃがでなく、刺身だったら起き上がるかもしれないが、刺身自体買ってこなくては家にはない。ア～アと大きなあくびをした。むさ苦しくて、嫌気がさす。もっと尊敬できる父親であつたらいいのに……。誰かこんな父を制してくれる人がいたら、僕は安堵して生活が送れるというのに……。頭の中で否定的な事ばかり浮かんでくる。どこか遠くの緑の大地で背伸びをしたい。なぜ、僕は、こんなだらしもない父の面倒を見ているのだ。自分の生きる道は……。ふと人生の先に考えが及び、怖くて恐ろしくて、ぶるぶる震えてしまう自分を想像してしまった。どうかしてるな……バカバカしい。それなりに自分らしく生きてきたと思ってきたのに、僕らしくない、と思わずにはいられなかった。かき消すように肉じゃがを頬張る。うまいよ、自分が作った肉じゃがは本当にうまい。空回りするのは空腹のせい。僕はそう思ってやけになって食いついた。

「明日から三日間、俺は家にいるからなっ」

少し力強い声をあげた。

「なんで、酔って家で寝てるつもり？」

僕は冷やかす気味に言った。すると、むくりと体を起こし、目を擦った。肉じゃがには手をつけず、僕の方を横目で見てにやりと笑った。

「あのな、裕樹～、明日から職員旅行のわけなんだけどな、俺はいかないから家にいるからな～たのむよ、なあ、いいだろ～」

「明日から旅行？　なんでいかないわけ、とつつあん」

「……父さんなあ、飛行機乗れないんだよ、あんな重いもんが飛ぶわけないだろ、怖いんだよ」

そう言うと、いきなり泣き出した。顔をうつ伏して、子供のように泣き出した。その拍子に腕が肉じゃがの皿にひっかかり、汁がこぼれた。僕は何も言えなかった。ただひたすら食べ続けた。父が職員旅行にいかなくてもいいし、三日間家にいてもいいと思った。けれども、泣いている父を見ると、どうしても情けなく思えてならなかった。別に飛行機に乗れなかったってかまわないのだ。でも、なんで泣くんだ。酔ってるせいだろうか。僕は早食いをすると、さっさと席を立った。

「とつつあん、ほら、布巾でふきなよ」

冷淡にそう言い放って、流しに自分の食器を持って行って洗い始めた。水の音がし始めると、なぜか父の泣き声は静まり、肉じゃがをハシで不器用たらしく食べ始めた。内心、溜息を何回もはきながら、台所を後にした。

「裕樹～よろしく頼むからな、お前はいい子だ～」

声だけが僕の背中を部屋へと押していった。

## 真面目な話

今日、ママさんからのメールを受け取って、毎日仕事をしていてもとても虚しいという言葉が、僕には普通にとれたんだ。ママさんが言っているように、僕は君に反発して、説教するようなことはしないよ。そんな男も世の中にはたくさんいるかもしれないけど。楽しいことを探し回っているうちに、何にもなくなって、この毎日がとても平凡で何が楽しいのかさえわからなくなってしまおうんだ。関係ないかもしれないけど、僕は小学のときも中学のときも恋をしたことがないんだ。初恋がないって笑ってしまうよね。なんだかしらないけど、その後男子校に入って、専門学校もほとんど男だったし、女の子には多少の興味はわいていたけど、どういうわけか実感がないんだ。近くに女の子がいないってこともあるのかもしれない。それに、僕はもてるタイプじゃないから、女の子が寄ってくる感じもないし。時々、思うんだ。このまま独りでいるんじゃないかな。女の子のことは何も知らなくて、見ているだけで、人生終わってしまうような不安。時間はとまってくれないから、地道に老いているんだ。僕はもう子供でもないし、希望に満ち溢れてるってわけじゃないんだ。僕の考えは年をとってしまっているかな。小さい頃からそうなんだ。希望とか夢より現実を生きてきた気がする。アイドルになりたいっていう女の子もいるかもしれないけど、僕にとっては今夜の食事を何にするかの方が大切なんだよ。これって、ママさんにとっては、とつてもつまらない話だよ。夢も希望もないのが僕だよ。でも、ママさんからこうしてメールがくるのは、本当に嬉しいんだよ。きっとママさんがメールをくれなくなったら、僕は君がどうかしたんじゃないかって心配すると思う。毎日虚しい生活の活力なんだ。顔の見えない君と僕のメール交換が、明日を楽しくさせてくれる。僕のつまらない毎日の中での、光

だよ！ 職場では周りも浮かない顔してるけど、たまにマミさんの気持ちを考えると、満たされた気分になるんだ。

マミさんのメールを読んで考えたんだ。世の中にはそんな楽しいことはないって。幸せなこともほんの少しだって……。これってやっぱり希望なさすぎかな？ マミさんはどう思うだろう。幸せをずっと求めて、今の生活に虚しさがつきまどってしまいうndらうか。考え方ひとつだよ、なんて軽いことは言わないよ。ただこうしてメールをしているだけで、僕は充分なんだ。マミさんはもっと何かを求めて、何かをしたいんだらうか。夢がない男は虚しさの典型かもしれないけど、改めてメールを続けていきたいよ。僕に何か不満があったら、遠慮なくメールに書いてくれていいよ。嘘をつかれるのは好きじゃないからね。今日は真剣に、真面目にパソコンに向い合ってしまったよ。マミさんがどう思ったか少しだけ臆病な僕だけど、明日もメール必ず読むよ。

つまらない気分にしたらごめん！ じゃ、おやすみ！

ヒロ

中村さんが、レジの近くの椅子に座って頬づえをついている。僕はパソコンの売上表を見ながら、声をかけた。

「なんかあったんですか？ 浮かない感じですね」

「……まあね」

中村さんの声は遠くに響いたように聞こえた。店の宣伝用の音楽が途切れて、逆に声にのまれたようでもあった。僕は少し軽い口調で言った。

「彼女にふられたんですか？」

「俺が女、彼は男、そんなのありかよっ。生が一番だよ、女でもてても俺は男だしー」

ふてくされた中村さんの前に店長が来た。

「さぼるんだったら、辞めてもらうよ、代わりなんかいくらだっているんだし」

中村さんはしぶしぶ立ち上がる。僕はパソコンと向き合う。

「いらっしやいませ～」

店長の一声で、店内のあちらこちらからこだまし始めた。今日も明日もあさっても同じなんだろう……。そして、革命を起こさなければ、自分はただ年老いていく。せめて六十歳まで保障できる何かってないかな。頭の中で探っているうちに何も見つからなくて、どうでもよくなって、パソコンの並んだ数字を見つめた。

夜十一時頃、父の声で僕の肩はぎくりと動いた。父が叫んだのだ。耳を澄ますと、歌をうたっているようにも聞こえる。また酒を飲んで寝言か。いつまで続くのだろう。僕は父の隣に寝たくはないし、夜は極力二階の自室に引っ込んでいる。父がどんな気分にいるのかわからないが、あの寝言というか叫びは一体何だろう。五十代後半にもなると、誰でもあんな枯れ果てた声で家中を震撼させるのだろうか。僕は父のようになりたくない。将来は見えないが、酒におぼれて毎日を無駄にしたいくはないのだ。父が公務員で仕事をしているという以外、何のとりえがあるのだろうか。僕は父を思うと、腹が立ってきた。役ただずの骨董品！ 父には僕しかいない。たった一

人の家族という指名感もあるせいか、家からはとても離れがたいのだ。父は僕がいないとダメなんだ。だからこうして毎晩寝言が聞こえるのだ。つまらない理屈の密度が濃くなっていく自分。僕も父の血をひいているわけだが、絶対変身してやる！ パソコンの中のミキちゃんが微笑んだとき、素直に可愛いと思ってしまった。溶けていく脳みそが、とつつあんなんかどうだっていい！と叫んでいるみたいだった。

マミさんからいつものようにメールが入っている。ミキちゃんの笑顔が頭に焼きついている中、マミさんの顔も勝手に想像してしまい、頬が緩んだ。

こんばんは

今日は会社で昼食時間、すごく浮いてしまったのよ。周りの人達が、とっても楽しそうに見えて、自分が面白く過ごしてないことに気づいて沈んでしまったの。もうやだ！って黙っていたら、本当に誰も話しかけてはくれなかった。所詮、私ってそういう人間なのよね。いてもいなくてもわからない存在っていうか、小さい頃からそうだった気がするな。あ～あ。溜息ばかり。会社辞めようかな～とか……。私に特別な才能があったらいいのに。自分だけの世界が作れたらいいのに。何もかもないものねだりよね！ほんと、淋しいんだあ。

ヒロ君とメール交換して気が休まるの。一日の終わりがメール書くことなのよ。ヒロ君のメール読んでるうちに、何か起こさなくっちゃって思うようになったの。考えたんだけど、このままじゃダメって思っ。思いきっていうけど、私と会ってくれない？ヒロ君がどんな顔してようとかまわらない、だって、私もブスだもの。でも、会って実際いろんな話をしてみたいの。これでも悩んだんだあ。会って何か話したら、自分が変わるかもって思っ。ヒロ君会ってくれるかな？私は会いたいよ。何か飲みながら話すだけで充分だから、ねえ、会ってくれる？お願い、会ってね。ヒロ君の外見がどうとかってことはないの。ヒロ君のことはとっても信用してるから……。

今度のメールで返事ください。待ち合わせとか決めたいし。場所は、上野って勝手に決めちゃった。公園もあるし、落ち着いて話ができそう。もし会えるなら、赤の薄手のセーターに黒のカーディガン、ジーパンはいてくわ。髪は肩につくくらいで、ちょっと細身かな。日時はヒロ君の都合でいいわよ。楽しみにしてる、ほんとよ。気が早いね、私っ。返事もらえたら、もっと詳しく待ち合わせを決めたいな。じゃ、またね！

マミ

マミさんが僕を誘ってくれるとは思ってもよらなかった。嬉しい。マミさんはもう会う気にいるらしい。自分も断る理由はなかった。外見は関係ないという言葉が余計に安心させる。自分から誘うことを押し殺していたせいか、こうして相手から変化がやってくるのが意外だと思った。僕こそ臆病なんだな。会って何を話そう。今からワクワクする。マミさんのメールのひとつひとつの言葉が、僕を勇気づけてくれるせいだろう。なぜか不安を感じなかった。僕の退屈な人生がここで変革しようとしているのを感じる。曲がり角に今立っているのだ。女の子と真面目に話をするなんて、今までなかった気がする。とにかく早く会おう。待ちきれない気持ちを押しえながら、今度の休みや希望の時間と自分の特徴、それからこの気持ちをパソコンに齧りつくように打ち

込んだ。

上野の公園口の改札を出たところで待ち合わせた。券売機の前あたりで立ち尽くした。午後一時十分前。人がどんと公園や美術館の方へ向かっていく。遠くを見ると、鮮やかな緑で森が茂っている。その上に青空。少し汗ばむくらいの陽気で心地よい。会うには絶好だ。これをデートと呼んでいいのだろうか。女の子と食事をしたり、お茶を飲んだりすれば、それはデートになるわけだ。生まれて初めてだ。もし、ママさんが僕のことを気にいってくれば、恋人同士になれるかもしれない。……恋人なんて照れくさい。せめて友達でもいい。何でも話のできる友達。嘘のかけひきなんてない真の友達。そこから始めよう。恋人になるのは後でもいい。ママさんがその気になってくれさえすれば、僕はいつだって歓迎するつもりだ……。

時計を見た。一時を五分ほど過ぎた。一時に待ち合わせたのだが、まだママさんらしい人は見かけない。改札口から出てくる一人一人を目で追う。携帯のアドレスくらい教えてもらえばよかった。すっかり忘れていた。ママさんに何かあってもこれでは連絡とれないじゃないか……。舞い上がりすぎて、肝心なことを忘れていたのだ。でも、僕は信用している。昨日のメールでも楽しみにしている様子が書かれていたじゃないか。来てくれるはずだ。目で追うが、赤のセーターを着ている女の子はまだいない。

三十分すぎた。どうしたのだろう。急用でこれなくなったのではないだろうか。赤のセーター、黒のカーディガン、ジーンズ……。改札口からどっと人が流れてきても、見逃さない。ママさん、ママさん……。

……一時間。やはりママさんらしい人は現れない。立ち尽くした足が重い棒のように感じる。……二時間。……こない。家に帰ろう。メールに何か入っているかもしれない。急用があったにちがいない。僕は不安でたまらなくなった。急いで切符を買い、足早に改札口を通り抜けた。息を切らして家に着いた。汗で背中がびしょりだ。慌てて二階の部屋にいき、パソコンの電源をつけた。いつもより起動するのが遅く感じられた。額の汗を拭い、マウスを握りしめた。メールが一通入っている。手が汗ばんだ。件名がない。一文が目飛び込んできた。

デブ男とは付き合えないからね

一瞬、何のことかわからなかった。アドレスを見ると、携帯からだった。一時十四分。僕はすべてを把握した。怖かった。拒絶されてしまった自分をどうにも慰められずに、そのままベッドに横になった。涙はでないけれど、心が悲鳴をあげているようだった。デブ……心臓に刻み込むように心の中で繰り返した。そのまま意識が遠のいていく気がした。

目を覚ました。眠っていたのだ。下から父の大声が聞こえてくる。「おい、裕樹、何やってんだよ、夕メシの用意はどうした？ こっちはお腹すいてんだよ、冷蔵庫にはほとんど何もないじゃないかよっ、今日は休みだったんだろっ、何か買い足しておいてくれればよかったのに！ こっちは会議で頭絞られたんだ、お前みたいにのんきじゃないんだぞ、俺が公務員だからこの家だつてなりたつてるんだぞ、せめて夕メシくらい準備しておいてくれなきゃなあ～困るよ、裕樹」

僕はベッドから起き上がった。煮え狂った気がしながら、階段を下りた。

台所のドアを開けた。父は僕の顔を見るなり言った。



「裕樹、パソコン買ってきたんだよ、お前、パソコン強いだろ、セットしてくれよっ。後でいいからなっ、とにかく腹が減ってるんだ、何か作ってくれよっ」

父を睨んだ。テーブルにパソコンの入った大きな箱が置かれている。頭に全身の血がのぼっていくのを感じた。意識が飛んで天にのぼって、脳の血管がざっくりと切れた。僕は父に近づき、テーブルの上のパソコンを持ちあげ、床に叩きつけた。

「もうやだったら！ 死んじまえ！ 死んじまえ！」

僕は何度も叫んだ。涙がとめどなく流れた。

「ど、どうしたんだよっ、裕樹、何があったんだ！」

「死ね！ バカヤロウ、バカヤロウ！」

呼吸が荒くなった。誰に死ねなどと言っているのかわからなかった。パソコンが自分の足にあたったが、痛いとは思わなかった。神経がまるっきりなくなってた。涙と鼻水がただ流れてくるだけだった。

「俺が悪かったよ！ 裕樹、落ち着けよ！ 落ち着けたら！」

父の悲鳴のような声が耳に刺さってくる。僕は腕をだらりと垂れ下げている。呼吸と心拍数が激しくなり、涙が自分の全てを吐き出してきている。しだいに落ち着いてきた。パソコンが壊れてしまったのではないかと頭を過った。

「俺が裕樹に甘えていたよ！ お、俺は悪い親だよなあ」

父は慌てふためいているようだった。僕は顔をあげることができずにいた。

「もういい、と、父さんがコンビニで弁当買ってくるからなっ、お前は何もしないでいいからな」

父はポケットから財布を取り出していた。ちょうど視線が父の手にあたった。手が震えている。すぐに父は玄関を飛び出していった。僕は父に暴言を吐いてしまったことを後悔した。床に叩き落したパソコンを持ち上げ、テーブルに置いた。下を見ると、床に傷がついていた。そして、右足の靴下から真っ赤な血が滲み出ていた。なぜこんなことをしてしまったのかわからなかった。父に顔も向けられない。今度は自分が情けなくて涙が出てきた。部屋に戻り、ベッドに横たわり、布団をかぶった。また、デブ……という言葉が思い浮かんできた。頭を両手で抱え、苦しい、死にたい、と何度も声をあげて繰り返した。体はじんわりと熱を帯びていた。布団に丸まった。とつつあん、悪かったよ……。声はしだいに小さくなった。僕ってやつは……。僕って……。意識が徐々に闇の渦に巻き込まれていくのを感じた。瞑った目の前に明るい月が見える……。

目を覚ました。時計を見ると、六時になるところだった。朝だ……。僕は静かに階段をおりた。腹がグウグウ唸っている。昨夜何も食べずに寝てしまったのだ。ふとテーブルの上を見ると、何やら紙が置いてある。何か書いてある。

裕樹へ

父さんは、今日福島へいく。おばあちゃんにまた来てもらうように頼んでくる。お前一人に家の事を任せた俺が悪かった。おばあちゃんはきっと家に来てくれると思う。留守番頼む。

僕はがっかりした。祖母に来てもらいたくないのだ。またあの窮屈な生活に戻りたくはなかった。溜息が漏れた。昨日の自分は気まぐれだったんだよ。とつつあんに謝りたかった。呆然とメモ紙を見ながら、溜息を何度となくついた。

ようやく諦めがついた頃、食事をとり、ゴミの整理と部屋の掃除をした。

出勤まで時間があったので、パソコンの電源をいれた。もちろんマミからのメールは入っていない。画面上のミキちゃんが、どうしたの？元気ないね……今度一緒にケーキ食べない？ミキは君の味方だよ！元気だして！元気だして！　といいタイミングで僕に語りかけている。ほんの少し力が湧いてきた。とつつあんの事は後回しにして仕事にいかなくちゃ……。ミキちゃんの絶えることのない笑顔が勇気をくれるんだ。

出勤すると、なぜか女の子がいた。僕は即座に店長に聞いた。

「あ、昨日ね、中村君が辞めたんだよ。とめたんだけどね、もう来ないっていうから、どうしようもなくってね。何でも急は困るんだよねー。その代わりにバイトの子をいれることになったんだ。すぐ来てもらうことにしたんだけど、あくまで臨時だよ、斉藤さんっていうんだ、古木君には紹介してなかったね」

店長は斉藤さんと呼び、お互い挨拶をした。よく見ると小太りの目の小さい子だった。美人でも可愛い子でもなかったが、気さくに何でも話す子だった。臨時だというのに、すぐに職場のアイドルになってしまった。不思議なものだ……。

それから二日ほどして父は帰ってきた。

「おばあちゃんに怒られたよ。もう関わりたくないだとき。まあ、母さんもないことだし、もう親戚とはいえないくらい他人行儀だったよ。きついねえ」

そう言って、酒を飲み出した。

その夜、僕は初めて父と酒を飲んだ。父は陽気になった。そして、僕もまた陽気になった。

「とつつあんがアル中になっても、僕は面倒みないからね」

「ああ、いいさ～ジョンにみてもらうからいいさ～」

そうとつつあんなはわけわからないことを口にして、コップの酒をぐいと飲み干した。